

保育の中の

小さなこと大切なこと③

守 永 英 子

二月の誕生会を、二、三日あとに控えて、三、四人の子どもが、お菓子の入れたものを作り始めていた日であった。

その子どもたちのそばで忙しくしている私のところへ、S夫がやってきて、「小鳥のおかし入れ作る」と言う。「前から考えていたかのような、はっきりした意志表示だな」などと感じながら、私は、いろいろな思いをこめて「そう、どんなことにしましょうか？」と問い返した。というのは、

- どの程度具体的なイメージを持っているのだろうか。
- イメージがあるのならば、それを実現させてあげたい。
- はっきりしたイメージがなければ、イメージ作りの手伝いをしなければならぬ。
- “作りたい”というせつかくの気持ちだが、いま私の助力を

必要としている他の子どもたちにかまけているうちに、消えてしまわないように、せめて言葉だけでも受けとめて、意欲を持続させたい。

などの思いをこめた、問い返しの一言なのである。

しかしS夫は、それ以上の積極的な働きかけはせず、私のそばを離れ、少し遊んでは戻ってきて「小鳥のおかし入れ作って！」と言う。「どういうのにしましょうか」と言うのと、

「エプロンしてないんだよ」と言う。そういえば、十一月の誕生会の時は、「ほく」だよ」と言って作ったお菓子入れに、園児のようにエプロンをかけたようにしてあげたことがあった。そして、M子が、小鳥のお菓子入れをつくって「Sちゃんのようにして」というので、M子の小鳥にもエプロンをかけているようにしてあげたことがあった。どちらを覚えていたのか、とにかく、「エプロンをしてない小鳥のお菓子入れを作って」ということのようにであった。

S夫はひとりっ子で、子ども同志より大人に接触を求め、「先生、遊んで」「いっしょに、これして」などの要求が多い。自分から何かをするというより、大人にしてもらおうとする姿勢である。

「小鳥のお菓子入れ」も、彼の気持ちには、「やって」と私に要求するところまでのようであった。「彼自身の枠からもう一步踏み出してほしい」「どうしたらそれができるか」が、その時の彼に対して持った私自身の課題であった。

翌朝、登園して間もないS夫に「Sちゃんは、小鳥のお菓子入れを作るんだったわね」と声をかけると、「こうやって（羽をひろげて）とんでるんだよ」と、はっきりとした反応である。そこで園の玄関にある鳥かごを二人で見に行った。S夫に小鳥をみせるためと、私自身もヒントを得るために。

保育室に戻ってからは、S夫に働きかけながらの共同作業である。「小鳥のからだはどうする？　こういう箇のようなのにする？　それとも、こういうのが（なすび形のような）いいかしら？」子どもの側に積極的な考えがなくて事が進まない時は、私の方から案を出して、相手の選択にゆだねてみる。

「こう（なすび形）がいい」と彼はあっさり決め、「顔はどうする？」などの促しに彼の活動はスムーズに流れ出した。小鳥の円い顔が出来上り、乗って来た彼は、「足も作らなく

ちゃ」と言いながら、小さく切った四角い紙に、V形に線を書き込んだ。羽は、羽毛のような感じに短い線を沢山書き込んで、「出来た」と言う。羽の輪郭はなく、四角い画用紙のままである。「どうする？（小鳥の胴にあてて）このままつける？　それとも、もう少し小さくする？」と聞くと、S夫は、いつもの「できない、やって」を忘れたように、さっさと、適当な大きさに切った。顔をつけ、羽をつけ、足をつけて、小鳥が出来上った時のS夫のうれしそうな顔。自分の考えを実現し得た子どもの、満足に輝く顔に出会えることは、こういう仕事についているものの冥加かも知れない。（母親の話では、S夫は、小鳥にバタバタちゃんと名前をつけて、大事にしているとのことである。）

この満足は、自信につながり、また、子ども自身の成長の喜びにつながるものではないだろうか。彼の心の中にひろがっていた大人への「依存」にとつてかわって、自分自身の「成長の喜び」が大きな位置を占めていく日を心待ちにしながら、根気よく彼をささえ、見守って行きたいと思う。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）